新鋭書下ろし作品

天馬空を行く

冥王まさ子

新潮社

天馬空（くう）を行く

冥王まさ子

新潮社

天馬空を行く
著者／冥王まさ子
*
印刷／昭和60年11月20日
発行／昭和60年11月25日
発行者／佐藤亮一
発行所／株式会社新潮社
郵便番号162／東京都新宿区矢来町71／振替東京4-808
電話・業務部 03(266)5111・編集部 03(266)5411
*
印刷所／株式会社光邦
製本所／大口製本株式会社
*
定価／1300円
© Masako Meio, Printed in Japan. 1985
ISBN4-10-600813-0 C0093
乱丁・落丁本は，御面倒ですが小社通信係宛御送付
下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

天馬空を行く　目次

1 ニューヘイヴンから 7
2 ルクセンブルグ 20
3 アントワープ 34
4 アムステルダム 48
5 エディンバラ 69
6 湖水地方 90
7 再びエディンバラ 102
8 ロンドン 111

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.co

9 汽車の中 141
10 マドリード 156
11 リスボン 171
12 道中 197
13 パリ、そして 205
14 漂流 232
15 アイスランド 246
あとがき 259

装画　石原靖夫

天馬空を行く

一九七六年夏

1　ニューヘイヴンから

大学図書館の重い扉を押し開けると、まぶしすぎるほどの光があふれている。七月だ。光は弓子をピラニアの群のように襲ってきて、全身をつつく。弓子は明るさにまだなじめない眼を細くして、光の中に立ちつくす。キャンパスが白金色の薄幕の向こうにゆらゆらとひろがっている。ぎらつく白い石段、幻想的なゴシックふうの校舎、なめらかな芝生、その上で群れている色とりどりの夏姿の学生たち。眼に映るすべてのものが光の粒子になってぴちぴちと躍っている。梅雨のない北国の七月は遅い春のつづきのようにさわやかで、真昼の太陽は熱すぎもせず、ただありあまる光を放射している。弓子は冬眠から醒めたばかりの小動物のように、四肢を思いきり伸ばしたい。

夏をこんなに待ち焦がれたのははじめてだ。少女だったときでさえ、夏を解放の季節だと思ったことは一度もない。むんむんする暑さの中で猫のようにでれっと床にへばりついて、動けなくなってしまうのがつねだった。今はちがう。毛孔という毛孔から外気を吸い込んで、空にむかってむくむくと身体を膨ませたい。夏の雲になりたい。洞窟みたいな図書館にじっとこもってひたすら本を読みあさるより他はなかった一年がやっと過ぎ、弓子は借りためた本を一冊残らず元の暗がりに押し戻してきたところだ。学問なんてやっぱりわたしの性には合わないらしい。一年間につもった塵をさばさばと払い落した今、弓子は自分が長い年月まったく不向きのことに身をすり減らしてきたような気がしてならない。わたしは本当は獲物を追って野山を駆け回る狩人に生れたのだ。スリルを求めて湧き返る血を体内に押しとどめることはもうできない。ましてや想像力だけでなく踵にも翼が生えるこの季節には。すべての書を捨て、外に出よう。もしかしたらわたしはかつてユーラシアの大草原を疾駆した騎馬民族の末裔かもしれないのだ。

照り返しのはげしい石段をうきうきと降りかけたとき、ポール・ドマン教授が道路から曲ってきた。しゃれた淡青色のサマー・スーツを着て、いつもより十ぐらい若く見える。夏なのだ。赤味がかったくしゃくしゃの金髪が太陽の光を浴びて輝いている。前かがみに石段を登りはじめたドマン教授は、弓子に気づくと首を鳥のように伸ばして、やあ、と渋い顔を微笑に変えた。猛禽類のように丸く剝いた

大きな青い眼、垂れそうな重い鼻、厚すぎる唇、フラマン人特有の風貌がやわらかく崩れた瞬間、弓子の中でヨーロッパが巻き戻した地図のようにひろがった。

元気かね、はい、と型通りの挨拶がすんでから、ドマン教授は、「リュウはどうしている、しばらく会わないが」と龍夫の消息を弓子に訊いた。

しばらくといってもほんの一週間前、ドマン教授は龍夫の論文を読んでくれたばかりだ。大学の授業が五月はじめに終ったあと、ひと月がかりで龍夫が書いた論文を、またひと月かけて弓子が英語に直し、タイプで打った。昼も夜もなく弓子が仕事に没頭する間、龍夫は騒々しい漠と羚を公園に連れ出し、風呂に入れ、寝かしつけ、みんなのためにカレーライスを作りさえした。龍夫がカレーライスを作るのは弓子が二人分の修士論文をタイプで打ったとき以来八年ぶりで、まずいなどと文句をいえば二度と作ってくれそうもない。こうして大騒ぎして仕上げた「マルクスの価値形態論」にドマン教授は驚嘆して、高々とVサインを掲げてくれた。そして、雑誌に載せないか、と薦めてくれたのに、ひと月の間に龍夫はもうべつの考えにとり憑かれ、それが星雲のようにもやもやと形をなさないので呻いている。

「あの論文はもう古いといって放棄してしまいました」と弓子は龍夫に代って答えた。「ゼロからやり直すんですって。今は考えがもつれて、頭の中が迷路になっています」

「彼らしいな」とドマン教授は笑った。

作っては壊し、壊しては作り、龍夫の思考は砂遊びに夢中の幼児と同じだ。弓子はそれと十一年つき合ってきた。長いといえば長いし、始まったばかりといえば始まったばかりだ。

「ヨーロッパへはいつ発つのかね」

「明日、のつもりです」

ドマン教授は弓子のいいかたにまた笑った。「明日じゃ準備で忙しいね。子どもたちも旅行が楽しみで張り切っているだろうね」

「ところがちっともそうじゃないんです。まあ、子どもにとっては毎日の生活が旅行中みたいなんですものね」

「それはそうだ。ところで飛行機の切符はもう買ったかね」

ドマン教授らしい、核心を衝く質問だ。

「まだ」と弓子は威勢よく答える。「今日これから買いに行くところです」

ドマン教授はにやっと笑って、「まったく君たちらしいな」と首を振った。

ほんの数か月のつき合いでドマン教授は弓子と龍夫の性格を見抜いている。軽薄すれすれの無計画性と無鉄砲さを、彼は同類のように面白がる。自分のことは何もいわないが、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.co

大戦後ベルギーから渡ってきた人だ、波乱にみちた半生を送ってきたにちがいない。大学で教え子と恋愛をして不倫ゆえに職を追われた、という噂もある。その教え子が今の奥さんだ。アメリカ随一の批評家、となかば神格化されながら、ドマン教授の眼はいつもいたずらっ子の好奇心で大きく剝かれている。

「元気で行っておいで」と弓子を励ますと、ドマン教授は推定年齢五十五、六にしてはかがみすぎる背をして石段を登って行った。いつもなら彼に会ったあとは足が前へ前へとはずむのに、心残りがして弓子は立ち止まったまま振り返り、グリム童話の魔女のようなうしろ姿を見送った。あっさり別れたけれど、これがドマン教授の見おさめかもしれないのだ。人の出入りのはげしいニューヘイヴンでは、別れは日常茶飯になっていて、軽い会釈を交したつぎの日に永遠に別れてしまうのがふつうなのだから。

視線を背に感じたのか、ドマン教授は重い扉に手をかけながら振り向いた。

「知ってるかね、ヨーロッパは猛暑だよ。旱魃が二か月もつづいているからね」

「大丈夫、わたしたちはついていますから、ヨーロッパに着いたとたんきっとどしゃぶりですよ」

ドマン教授はきっきっと笑って、知識の大竈の中へ消えて行った。

夏の旅へ。雲と風と光のカーニヴァルへ。血湧き肉躍る祝祭がいよいよ始まるのだ。旅にむかって弓子の細胞という細胞が磁石を寄せた砂鉄のようにざくざくと立ち上がる。

ヨーロッパに行こうよ、近いんだから、と弓子がいい出した。龍夫のアメリカでの任務は終ったのだし、さしあたってしなければならないことは何もない。龍夫だって外国生活にすっかりなじんで、滞在を一日でも延ばしたいと思っている。かといって、知人がほとんど脱出してしまったこの街にいて何者でもない自分に耐えながらひと夏を過す気にはとてもなれない。日本に帰る日を死刑囚のように悶々と指折り数えて待つだけだろう。八月末には帰らねばならない。そして漠を小学校に入れる準備をし、羚の保育園探しにひと苦労する。わたしも身の振りかたを考えねば。それを思うだけで弓子の胃はきりきりと痛む。だがそれまでは天下晴れて自由の身だ。何をしてもしなくてもいい、正真正銘からっぽの時間、くよくよしても無駄なその区切られた時間のただ中を、弓子は何者とも形定まらず、雲のように鯨になり象になり羊になって漂いたい。

ヨーロッパ旅行なんて贅沢だ。弓子の提案を一度は却下することに決めている龍夫は、まずそういって反対した。第一そんな金はないだろ。ここにいたってお金はかかります、アメリカはものすごい物価高なんだから。ヨーロッパ

をうろうろしている方が安くつくくらいよ。飛行機代はどうするんだよ。あたしが何とかひねり出すわよ。餓鬼どもも連れて行くんだろ、大変だよ。アメリカ人だって貧乏旅行と子連れ旅行は最悪の両横綱だっていっているじゃないか。うちのは特にひどいんだからな。あいつらはどうせどこにいたってひどいじゃない。アパートで大人しくさせようとしてこっちが疲れ果てるより、世界中引き回してあいつらをくたくたにする方がましだと思わない？

何かをしない理由は何かをする理由と同じだけあり、それはいつも対になって行為の前に立ちふさがる。どちらの理由にも根拠はない。要は、するかしないかを決めることだ。何もしないよりは悪いことでもする方がましだ、と弓子は思っている。さもなければ人生は退屈だ。だからこそ結婚だってしたんじゃないか。決めてした以上は後悔しないこと、途中でほうり出さないこと。その鉄則さえ貫けば、自転公転する地球の引力圏内にとどまれるだろう。

おれはここにいて本を読みたいんだよ、と龍夫が本音を吐いた。じゃあ、あなた一人で残りなさいよ、あたしは子どもを連れて行く。その方が静かに勉強できるでしょ。わかったよ、おれも行ってやるよ。龍夫にとってもまたとない息抜きになるはずなのだ。ニューヘイヴンで日本文学を教え、英語を喋る緊張で硬ばったまま日本に帰ってあくせくと運転再開する前に、ぽっかりと時間に穴をあけ、目的からも義務からも解放されて漂ってみることが絶対に必要なのだ。ふつうの人のように息をして、ふつうの人のように現在を味わってみることが。

図書館の前に駐めておいた赤いフォルクスワーゲンに乗ると、弓子はその足でダウンタウンの旅行代理店に行った。

「明日発ちたい、ですって？」

たぷたぷする肉を黄色いワンピースにぎゅっと詰め込んだ、象のソーセージのような女性のエージェントは、巨体をのけぞらせて悲鳴を上げた。

「今をいつだと思っているの？　夏たけなわ、一年でいちばん混むシーズンよ。誰だって何か月も前から予約しているんですよ、特にこういう学生向きに安い飛行機はね」

「無理かしら」と弓子は無知で無邪気な外国人を装う。

正気なの、といわんばかりに呆れながら、黄色い象はゆさゆさと立って時刻表を取ってきて、アイスランド航空のフライト・スケジュールを調べ、電話をかける。臙脂色のマニキュアを塗った丸い指が電話機のぐるぐる巻きのコードを弄ぶ。厚塗りのファウンデーションからそばかすが点々と透けて見えるのを弓子は数えながら結果を待つ。巨体に似合わないてきぱきした応答がつづいたあと、「OK、サンキュー、ほっほっほっ、また電話します」といって黄色い象は受話器を置き、福笑いのような顔で弓子を見上げた。「明日の席はないけれど、あさって、金曜日のならあ

るそうよ。ただし週末料金五十ドル加算ですよ」
週末の便は高いからかろうじて売れ残ったのだ。ニューヨークールクセンブルグ間の往復切符を大人二枚、子ども二枚申し込んで、帰りはオープンにしてもらう。ひと月の予定だけれど、いつ何時とんで帰る羽目になるかわからないから。それと十五日間通用のユーレイル・パスを大人二枚、子ども一枚。税込みでしめて千七百六十九ドル五十セントだ。小切手帳を取り出すと、「現金で」と黄色い象はいった。「ユーレイル・パスは明日ニューヨークのオフィスで受け取ってもらいますから、その分は小切手でいいのよ」不渡りを警戒しているのだ。しかたがない、今は学年度の終りだし、わたしたちはあやしい外人なんだから。弓子はユーレイル・パスの代金を書き込んだ小切手を渡した。飛行機の切符はあとで現金と引換えだ。
「ヴェリー・グッド。他には何か」と三重顎の黄色い象が訊いた。
「そうね」と弓子はいそいで思案する。「ルクセンブルグからロンドンまでの連絡便があれば。乗るかどうかまだ決めてないから席の予約だけね。切符は当地で買いますから」
どうやらついているようだ。一時間ほどの待ち合わせでロンドン行きの便があって、席もすぐ取れた。
「七月十六日夜九時三十分ケネディ空港出発、OK？ アイスランド経由でルクセンブルグ到着が翌日正午、OK？」と黄色い象はいちいち念を押しながら航空券に書き込む。「ロンドン行きは十三時二十五分発、ルクセンブルグは夏時間だから一時間プラスになっています」
弓子は時差の計算には弱い。頭の中で地球儀をそろそろと回転させ、指を折って時間を数えたあと、それを足せばいいのか引けばいいのかわからない。それに夏時間などが加われば、いくら説明されても混乱が増すだけだ。しかも、聞くところでは、ヨーロッパの夏時間は国により年によりちがうらしい。だから、現地時間が何時だろうと、乗継ぎに間に合いさえすればいいのだ。間に合いさえすれば。ルクセンブルグかロンドンに無事舞い降りたら、あとは気分まかせ足まかせ、行きあたりばったりの出たとこ勝負で、つむじ風のようにヨーロッパを吹き抜けよう。
眼と鼻の距離にある行きつけの銀行で、弓子はユーレイル・パスの代金にほんの申し訳の十ドルを足して残し、あとはそっくり引き出した。月々振り込まれる給料をこんなときのためにと切り詰めていたら、正味十か月で三千四百ドルたまった。旅行代理店に支払ったあと千六百ドルほど残る。それに龍夫が三年前一人でヨーロッパ旅行をしたときに使い残したトラヴェラーズ・チェックを後生大事にアメリカまで持ってきたのが三百ドイツ・マルクある。マルクは今高値だから百二十ドルぐらいに当るだろう。『ヨー

ロッパへ行こう』という貧乏旅行の案内書を参考に買っておいた。一人一日十ドルでまかなえるそうだ。子連れではユース・ホステルやいかがわしい宿というわけには行かないから、十ドル・プラス・アルファで一日五十ドルを家族四人の必要経費と見ておこう。思いがけない出費もあるだろうから、ひと月でとんとんだ。お金がなくなったらとんで帰ればいい。留守の間に最後の給料千六百ドルが振り込まれるはずだから、返還されるアパートの保証金とボロ車を売りとばした代金をそれに足せば、日本に帰るまでの生活費と飛行機代は出せるだろう。自分をどたん場に追い込んで、倒産しかけた会社の経営者のように青息吐息でやりくりするのが弓子は好きだ。それも生活のまっただ中のささやかな冒険なのだ。

「買えたぞ、買えたぞう」

赤い表紙の航空券をひらひら掲げながら、弓子は龍夫が子どもたちと待っている「ナポリタン」に聖火ランナーのように駆け込んだ。子どもがテーブルの間を走り回っても大目に見てくれる唯一の店だ。三人は弓子を待たずにピツアとコカコーラの昼食をすませていた。同席者がいる。経済学者の今井さんと婚約者の鮎子さんだ。二人は子ども嫌いだというのに、獏と羚が早くも退屈してこづき合うのをいやがりもせず、あるいは気づきもしないほど熱心に龍夫と話し込んでいる。

「いよいよ行かなきゃならなくなったか」と龍夫がうらめしそうにいった。いまわの際まで切符が買えないことを願っていたのにちがいない。

今井さんと鮎子さんも一週間後にはヨーロッパに発つそうだ。今井さんはイギリスに、鮎子さんはフランスに一年間留学することになっている。

「パリかロンドンの街角でひょっこり出会うかもしれないわね」と弓子はそうしたい気もなしにいった。気ままにどこへでも行ける二人とはどだい境遇がちがうから、弓子は会っても話すことがない。それに今井さんは世界の先端を行く経済学の理論家だし、アメリカ育ちの鮎子さんはつい先頃大学を卒業したときに優等賞を一人占めにした才媛だ。龍夫は若い二人と意気投合して、会えば弓子そっちのけで抽象的な話にふける。弓子はそれが妬ましい。家事と育児で弓子の頭の半分はがたついていて、獏が生れた七年前からは新しい思想に興味も持てなくなっている。お前は不勉強だ、努力が足らんよ、と龍夫はきびしい。それなら家事を手伝ってよ、あたしに時間をちょうだいよ。時間だけの問題かな。

獏と羚がいつのまにか姿を消している。「静かになって助かったよ」と龍夫はいって、弓子に探させようともしない。静寂もつかの間、子どもたちはすぐに店の主人に背中

を押されて引き返してきた。
「この子たちがはだしでカウンターの前を走り回っていたので」と主人は堪忍袋の緒をきつく締めていった。靴まで脱いでしまったのだ。「ガラスの破片が足にささりでもするといけないから連れてきたんですよ」
アメリカ人はけっして、迷惑だとか困るとかはいわない。あくまでも偽善的に、子どもに危険だから、と弁明する。そこで弓子はいっそう恐縮してしまう。
「大変ねえ」と鮎子さんは溜息をついて、弓子が漠と羚を叱るのを見ている。
「旅行が思いやられるよ」と龍夫も溜息をつく。
「あたしたち、子ども要らないわね」と鮎子さんが子どもを産めそうもないきゃしゃな身体を魚のようにくねらせて、上眼づかいに今井さんの同意を求めた。今井さんは腕組みをして黙っている。

「明日の午後にはここを出てニューヨークに泊るんだから、今日中に準備をすませるのよ」と弓子が三人を追い立てるが、埃のように一瞬とび散るだけで三人とも動こうとしない。夜もふけたのに、漠と羚は居間いっぱいにレゴだの積木だのミニカーだのを撒き散らして遊びに夢中だ。龍夫は、「ぼくのは簡単だからあとで一人でやるよ」といって本とノートと鉛筆を持って寝室兼書斎に入ってしまった。しかたなく弓子はスーツケースを引っ張り出し、そのまわりにありったけの夏の衣類を積み上げて、より分けながら一人で荷作りにとりかかった。
まず羚の衣類から。三歳になったのに羚はまだお洩らしするので、パンツは持てるだけ持って行かなくては。洗濯もままならないだろうから、着替えはできるだけ多く。北の国は寒いらしいから、長袖と長ズボンも忘れずに。今日明日のうちに濡らす分をとり除いてパンツ十枚、半ズボン五枚、長ズボン二本、半袖シャツ五枚、長袖シャツ一枚、Tシャツ二枚、薄いセーター一枚、パジャマ三組、ソックス七足、当座の紙おむつ五枚、スウェードの靴を履いて行かせることにして替えのズック靴一足。それが羚の必需品だ。漠は始末がいいから少しですむ。パンツ、半ズボン、半袖シャツを五枚ずつ、長袖シャツ一枚、セーターは嫌いだからTシャツ三枚、パジャマ二組、ソックス七足、ズック靴一足。長ズボンは漠には不用だろう。つぎは龍夫。パンツ、ランニングシャツ、ポロシャツ各五枚、長袖シャツ二枚、パジャマ二組、ソックス五足。セーターは冬用の分厚いのしかないからやめて、木綿のサマー・ジャケットを着て行かせよう。ふだん用の夏ズボンは茶のジーンズが一本あるだけだから、それを穿き通させる。替えの靴も不用だし、第一持っていない。折りたたみ傘を二本と散髪用具を隙間に詰めると、大小二つのスーツケースははち切れそ

うになった。
ひと息ついていると、「お母さん、これも入れて」と漠と羚が両腕いっぱいにがらくたをかかえてきた。ミニカー、ピストル、カウボーイ・ハット、LSIゲーム、ボール、蒐集癖のある羚が空箱にぎっしりためた携帯用のクリーネックス・ティッシュにハンカチーフ、ふだんは見向きもしない漠の本が五、六冊、英単語学習絵本まである。
「冗談じゃありません、こんなもの」と弓子は怒鳴り、がらくたを二人の腕からもぎ取って散らかった衣類の上に投げたが、思い直すと、漠の童話の本を二冊と電動のバスケットボール・ゲームをスーツケースに押し込み、ミニカー十台をハンカチーフやティッシュと一緒に羚専用の手提げバッグに入れた。それからばたばたと子どもたちに寝る支度をさせ、寝室に追い込んだあと、さて今度はわたしの衣類、ともう一つスーツケースを取り出したところへ、龍夫がかかえ切れないほどの本を持ち込んできた。
「弓さん、これスーツケースに入らない？　ぼくのショールダーもういっぱいなんだよ」
「あんた、これ全部持って行く気？」
弓子の権幕にたじろいで、龍夫は悪いことをした子どものように、「いけない？」と訊いた。
「いけないも何も」といって弓子は膝をかかえてしまう。
「あんたのショールダーには何が入ってるの？」
「ルーズリーフ・ノートと本が六冊ほどだけど」と龍夫がこわごわいう。
「ショールダーごとここへ持ってきて」
龍夫は合計十五冊の本とアメリカ製の頑丈なルーズリーフ・ノートを弓子の前に並べた。どれもこれも大きくて厚い。龍夫はいつもこれだけの冊数を自分のまわりに置かないと本を読みはじめられない。数ページ読んでは飽きてつぎの本に移り、また数ページ読んでは思考が働き出してノートに書きはじめ、思考が止まるとべつの本に手を伸ばす。一冊を最後のページまでしっかり読まないとつぎの本に移れない弓子とは対照的だ。
「旅行中にどうしても読みたい本はどれ？」と弓子が詰問した。
「どれもといえばどれも、どれでもないといえばどれでもないな」と龍夫は自信がない。
「じゃ、いちばん厚いのを一冊選んで」
「たった一冊？」と龍夫はうらめしげだ。
「そう、余計なものは何一つ持って行けないのよ。この際一冊を読み通す訓練をしたら？　あなたの英語力ではきちんと読めばひと月以上かかるでしょう」
「もし早く読み終ったら、途中で買ってもいい？」と龍夫がおそるおそる訊いた。
「お金さえあれば。でもあなたのショールダーには羚のパ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.co